

【まぶい】

「なんか、とびでたぞい」

ぼくはいいました。

「それはいつですか」

懐爺はききました。

「いまじゃ。はなくそのんだら、ぶくぶくはおさまったが、なんかとびでた。【ぶくぶく】がびっくらこいて、とびだしたんかのう」

「【ぶくぶく】は、きつともう膀胱（ぼうこう）のなかです。とびだしたのは、金ちゃんの魂みたいなもので、というより、具体的には魂に寄生するおぼけで、【まぶい】といいます。寄生した自分だけとびだせばいいのに、魂も道ずれにしたがるんですよ」

「なぜに、とびでたんじゃろ」

「丸薬の成分に、しびれ薬があります。それにしびれて、驚いてとびだしたんでしようね」

懐爺は淡々といいました。

「なんとかならんかのう。たましいぬきでは、このさき、やっていかれんからのう」

「そんなこともありませんが、まあ、戻しておいたほうがいいでしょうね。【まぶい】はそのまま外界に残して、魂だけ戻しましょうか」

「そんなてじなが、できるんかのう」

「手品ではありませんが、ちょいと呪文を唱えましょう」

「じゅもんは、すきじゃ。ちちんぷいぷい、かのう」

「それは忍者の呪文。わたしのは、ちんちんぶらぶら」

「じつに、ふざけているのう」

「呪文というものは、みんなふざけたものなんです」

懐爺は真面目くさっていいました。

「ほんまかいな」

「ふざけたものほど、真剣なものはありません」

ちんちんぶらぶら

きんたまぶらぶら

どうしていつでも

ぶらぶらなのかな

じんせいぶらぶら

じんせいうらうら

うらうらだめだめ

ぶらぶらだめだめ

ちんちんぶらぶら

きんたまぶらぶら

きんちゃんほいさ

ふざけて真剣なものを、やってもらって、ぼくの魂は、無事に戻りました。
めでたし、めでたし。